

神奈川県演劇連盟機関誌

ドラマ神奈川

第6号

「ドラマ神奈川」第6号

(編集・発行)

1996年3月10日発行

神奈川県演劇連盟

横浜市中区福富町

☎045(261)4866

西通り52

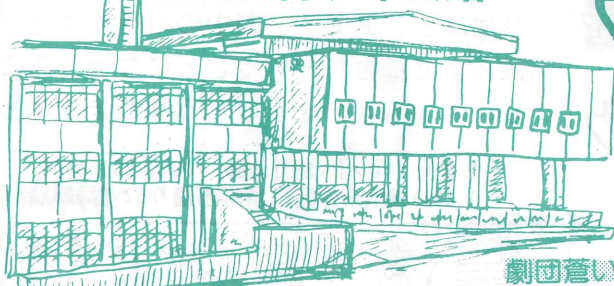
こんな劇場で公演しています

劇団河童座

プロセキムからロールバック式の客席までの何も無い空間。どうしても料理できる面白い空間です。舞台設備は多少難ありでも、それを越えた魅力ある空間です。25年間、横須賀演劇を支えて来た、手創り、自慢の空間です。



横須賀青少年会館



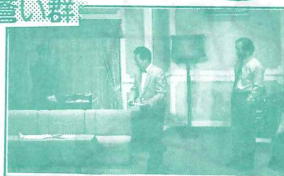
劇団夢樹



会社も役所も、円高・バブル崩壊の長期不況にあえぎ、演劇界もご他聞に漏れずという折り、県が横須賀青少年会館の閉鎖提案をしたことは私達にとって致命的です。これからの取組に、皆様のご支援をお願い申し上げます。

このホールは、私たち横須賀の演劇人の要望が、数々取り入れられて出来上がった、大変貴重なものです。このホールがあればこそ活発な活動が可能になっています。今年の秋も演劇フェスティバルに参加します。

劇団蒼い群



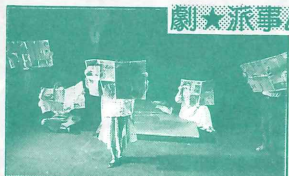
相鉄 本多劇場

劇団横浜のうくりあ

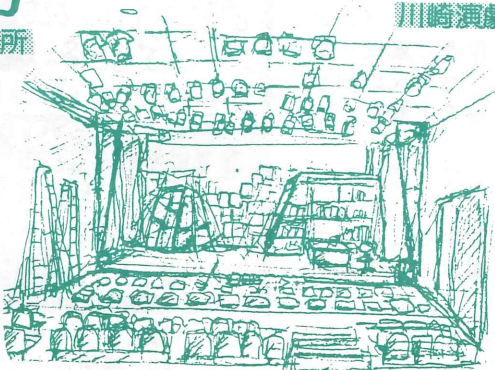


キャパ/ムードが、自分たちの表現スタイルに、ぴったりの劇場である。それに加え、本多のスタッフの姿勢が、より使い易さを、増す。一方、ワークシヨップをはじめとする情報発信の場としても、大切な位置にいる。

劇★派事△所



初の小劇場スタイルの小屋として相鉄本多劇場が横浜に進出した時、これでやっと本格的な創造活動に取り組める、と感動するとともに、そのグレードの高さに不安感も抱いたものだ。初心忘れべからず。



川崎演劇塾

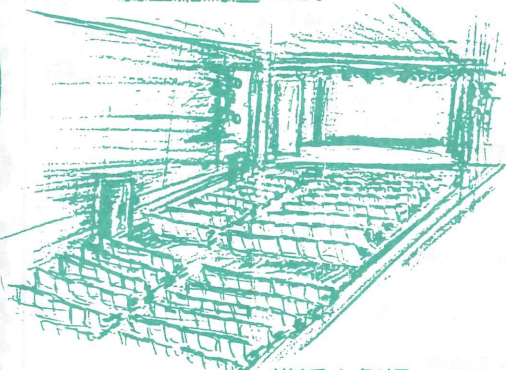


遠い劇場の様な気がしていました。でも使ってみるともう駄目です。お客様も、演じる私達にも便利な小屋です。川崎横浜だとこだわる時代ではありません。本多劇場に行けばなにかやっついているだろうと、当日売りのお客がいるのです。すつかりはまってしまいました。



劇団葡萄座

当ホールは、関内ホールの地下に遠慮がちに存在するキャパ264席の多目的ホール。その造りは決して芝居小屋と言いが、この手のホールにしては袖が広く使い勝手が良い事から現在重要な拠点の一つになっている。



横浜小劇場

関内 小ホール



「交通の便はいいのですが、舞台の天井が低いこと、シーリングの当たりが悪いこと、客席の半分が平らで観にくいこと、等が欠点です。ビルの地下の限られた空間にホールを押し込めたのだから、仕方ないことですが……。」

劇団蒼生樹

「忠臣蔵でござーる」

作・横山さとみ 演出・浜田重行
12月15日〜17日 教育文化ホール



何よりも吉例歳忘れ興業の継続と横山さんの初戯曲挑戦に拍手を送りたい。蒼生樹ならではの。

長屋のおかみさんたちの井戸端会議から、スタートし、女性の視点から女性の葛藤と生き方を描く。装置

は物干しをモチーフとし、転換は役者たちの手により行なわれる。美術が、芝居作りの中で、裏側からでなく、側面からも支えている。特に、ラストの一体感は見事だ。この芝居の最中、渡辺さんと清水さんのシーンで、いつも拍手などした経験のない私が、つい手を叩いてしまい「あー、演出にはまってしまった」と思う。観客をひきこむ魔術には勝てない。

長屋の人たちの生活と今の自分の位置を再確認する作業をさせてくれる座標軸と根拠の固定がはつきりしている芝居だったと思う。しかし価値感がこれ程多様化している現代において、共通の像としての定着を求めていだけでなく、いちファンとしては、今後、視点の方向を変えてみる試みも期待したい。

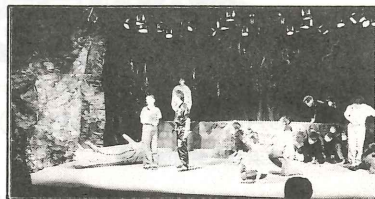
(担当・横濱にゆうくりあ)

劇団河童座

「タイプカプセル―本國物語」

作・演出／横田和弘

12月2日・3日 横須賀青少年会館
1月13日・14日 銀座小劇場



面白い構成だ。騒ぎで作動したシエルトは地下に埋められ一定の期間は地上に出ることは出来ない。乗り違わせた設計化学者と秘書、シエルトの宣伝ガイド、女優願望の女、ガリ勉の青年、おのぼりさんの娘、そして銀行強盗と追う警察官。彼らはシャバに帰れないことが判ると、どうせなら楽しく暮らそうとシエ

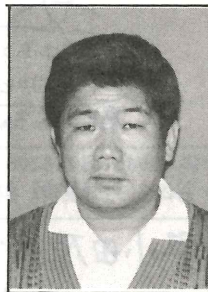
「客が来なくて続けられなくなったから、ためばいい。犯罪にはならない。自由だ。せつかく誇り高きアマチュア張ってるんだから。ただし自由贅沢なアマチュアだからこそ、それを商売として食べていかねばならないプロより、いい芝居を打たねばならない。プロには出来ない芝居を。志ひとつを友として」

つい先日、ある芝居仲間からもらった、手紙の一部です。同感です。私にとってのアマチュアイズムとはつまり、こういうことです。職業として芝居を考えたことはありません。ですから、もしそういう意味で聞かれれば、アマチュアと答えるのかもしれない。

アマチュアイズムは胸の奥に

劇団河童座

横田和弘



考 To
今、アマチュア問題提起

でも、観客はプロとかアマとかを提示されれば、クオリティの問題と捉えるのが、実状です。芝居の終わった後のアンケートに、「とてもアマチュアとは思えない」とか「プロよりも面白い」と書かれると、勿論ほめ言葉と解っていても、情けない気分になります。アマの上がプロと思うのが実状なのです。

一年に数回しか観に行かない観客にとって、(その劇団は別として)少しプロとアマと区別をしたら、多少入場料が高くて、プロの芝居を選ぶに違いありません。我々は表現者です。一人でも多くの人に観てもらいたいと思うのは、当然のことです。

私も劇団河童座は、プロ予備軍ではありません。でなければ、こんなに夢中になって芝居を続けては来なかったはずで。

何故そんなに夢中になれるかと言えば、当たり前ですが、芝居を創ることがたまたまなく好きだから、面白いからです。

私は地域の為とか、文化を守る為に芝居をやるわけではありません。勿論、芝居は一つの立派な文化だとは思いますが、でも芝居を演った後に文化なんてものは、生まれてくるものだと思っています。守るものでも育てる物でもない。自然に、生まれてくるのが、文化なんだ。生まれてくるという事は、もって力強いことなんだ。…と思います。義務とか責任などのために芝居をやるんだつたら、やめてしまえばいい。我々は創造すること、笑わせること、泣かせること、感動させることがすきだから芝居を演り、観て感動したい、観客がいる。そこに文化が生まれる…。

私にとってのアマチュアイズムのなかには、地域とか文化という意識はそれほどありません。それはあくまで結果だと思っていますからです。どうやら、アマチュアという言葉の捉え方で、それぞれに想いが変わって行くようです。私にとってのアマチュアイズムは、胸の奥にしまっておくこと………それでいいと思っています。

でも、声を大にしてアマチュアを宣言する気は、ありません。もつとも、誰に対して宣言するのでもしよ。ちょっと妙な話です。

もし芝居仲間がいまさら宣言をしたら、笑われそうな気がします。芝居を演っている人間なら、プロとアマの区別をすることの難しさと虚しさは、よく知っているはずですから。

もし、観客に向かって言うのなら、残念ながら、無意味な事だとも思います。泉谷氏の言うように、「表現の場にプロもアマもない」は、当然のことです。自分達の求める芝居が一番面白いと信じるから、これほどまでに、夢中になって芝居を創っているのです。

でも、観客はプロとかアマとかを提示されれば、クオリティの問題と捉えるのが、実状です。芝居の終わった後のアンケートに、「とてもアマチュアとは思えない」とか「プロよりも面白い」と書かれると、勿論ほめ言葉と解っていても、情けない気分になります。アマの上がプロと思うのが実状なのです。

一年に数回しか観に行かない観客にとって、(その劇団は別として)少しプロとアマと区別をしたら、多少入場料が高くて、プロの芝居を選ぶに違いありません。我々は表現者です。一人でも多くの人に観てもらいたいと思うのは、当然のことです。

「アマチュア」呼称に関する様々な考えを特集して来ました。いよいよ大づめ！ 今後は理事会の場へバトンタッチです。

ターを一本国と命名し、各大臣を自薦他薦、とにかくにぎやかに生活を始める。しかし、この空間に男女の男女の欲望はない。

そこにシェルターを寝ぐらにしていた一匹のカブト虫の親玉とゴキブリの若夫婦が脇役として登場する。たわいもないおしゃべりばかりであるが、それが最も人間臭い。ゴキブリは繁殖に歳月をかけている。これはリアリティがある。やっと地上に浮上したシェルターでは、あれほど社場に憧れていた一本国の人間は、今度は自分たちの意志でもう一度地下にシェルターを閉じ込めて了うのである。素材の違う二つ場面を同時に見せられると、やはり観客はリアリティのある場面に視点が向く。横浜、横須賀、東京と連続上演を成功させ、実験を恐れない河童座の舞台はエネルギーに溢れていた。

(担当・川崎演劇塾)

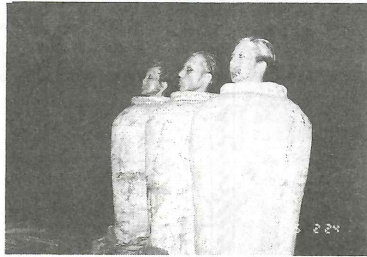
京浜協同劇団

新人自主企画公演

「芝居」 作 サミュエル・ベケット

演出 ミズノ タケジ

2月24日 劇団稽古場



京浜協同劇団新人自主企画公演、ベケットの『芝居』を観る。——新人自主企画公演…ん？面白い言いまわした。直訳すると、新人達が勝手にやった公演…ということか!? 何んだか親劇団（こんな言い方が成立

するかどうかわからないが)から認知されていない公演みたいだが…会場は劇団稽古場だし、ベテラン達もたくさん見守っていたし——ともかく、色々模索中ってことなんだろう。当方は単なる観客。ベケットだし、素朴に観ようっと。

実際、ベケットは素朴に観るに限る。存在自体の不条理、作品としての不条理、俳優の肉体論としての不条理と、重複するテーマの何処にスポットをあてるのかどうか。で、今回の『芝居』は、死しても尚、際限もなくくり返される男女の三角関係という点が良く表現されていたということから、存在自体の不条理ということか!? もつれた男女の関係性の中に解答が潜むということだろう。尤も私としては、俳優の肉体論の不条理という観点のベケットを見たかったのだが——。

(担当 劇★派事ム所)

ghether

ア演劇とは その3



投稿

劇団東演

津田英三

錯覚されている方もいらっしゃると思いますが、思いますので書いておきますが、我々プロと呼ばれる演劇人の大半が正当な報酬を得る演劇行為をしていない訳ではありません。正当どころか新作一本を上演すればその稽古期間も含めて、約二ヶ月無収入状態になることもしばしばです。わずかな出演料も交通費とお茶代に毛の生えたく程度で、お客様と一杯やれば足が出してしまいます。なんだそれじゃアマじゃないかと言われれば—そうです、アマです。しかしなぜかプロと呼ばれています。企業とのタイアップ、マスコミ出演のマネージメント料の振り分け等、劇団によって違いはありますが純粋な演劇公演の収支だけ

正当な報酬を払える劇団は殆んどありません。その為大多数のプロと呼ばれる演劇人は、他の仕事の報酬を元手に日常生活と演劇活動を維持しているのです。その仕事はマスメディアであるか居酒屋であるかは、演劇人としての査定には全く関係ありません。詳細は省きますがそれをクリアする為にはチケット一枚の料金を最低一万円ぐらいにしなければならぬのが現実で、それでも一般社会人並の生活にはほど遠いものでしょう。手伝いの仕事というのはそれだけ分割の合わないものなのです。演劇人としては我々もアマと称される方々も条件は全く一緒なのです。我々も殆んど持出しなのです。ならば外枠でプロかアマかを論じるよりもどんな演劇人であるかが問題でしょう。そこには演劇に対する認識が大きく関わってくるような気がします。まず構造面であれば絵画などは創造過程は見せず結果を見せる訳ですが、演劇は本番で創造過程を見せ、そしてそれが結果でもあります。ライブとは皆さうですが、音楽に於けるCD制作のようにライブ以外でも成立する段階がありません。その結果お客様に多少なりとも料金を払わせ、多大な時間を使わせるということが始めから含まれた構造になっています。買うか、買わないかではなく買って見てもらって初めて創造行為が完結する構造になっているのです。となればどんな公演でもそれに対する責任というものが出て来ます。俳優が自分でチケットを売るというのもその責任との関わりがあるからです。一方で文化としての認識があると思えます。これはどんな作品を上演するにも関わってくる微妙な問題ですが、根底にあるものとして、客の目の前で、生で、人間が、人間

の身体を使って、人間を演出する、唯一の創造文化であるということが言えると思えます。昨今、コンピュータやインターネット等の発達で増々人と人が接することなく生活が営まれてゆく社会の中で、俳優同士も、俳優とお客も、相対さなければ成立しない演劇は、とても人間的でこれから貴重な存在となるでしょう。人を喜ばせるのも、人を悲しませるのも最終的には人間です。だから他のものでは味わえないドラマと感動が生まれるのだと思います。その為には、古い—新しい、暗い—明るい、片くるしい—面白い、などという観点だけでは是非を問う段階では、本当の感動は生まれないと思えます。演劇が人間を追い求めるものであるならば、その素材は人間なら誰でも持っているわけです。人間を見つめること、これが演劇の本質となればこんな素敵な創造仕事は他にないと思えます。それは自分がどう生きるかに関わってくるからです。演劇をどうやるか、どこまでやるかは、自分がどう生きるかと同じことだと思います。だからやるんです。無報酬でも持ち出しでも。お互い良き演劇人になりましょう。プロかアマではなく!

略歴
劇団東演に25年間に在籍、「朝未来」「どん底」「栄光の季節」等に出演。他に「出張」「イカロス」、「埼玉総合芸術祭」等の演出を手がける一方、声優として日々の生活をしのぐ。



日頃思うこと

(社)横浜演劇研究所
研究調査部長

荒井賢一

私たちの研究調査部では創立以来、活動の一つとしてアンケートによる観客調査を行っています。中断はありますが連綿として続けてきた作業で、今は横浜アマチュア演劇連盟加盟5劇団の公演についての調査を行っています。調査用紙の作成、公演各ステージ毎の調査員の配置、用紙の配布・回収・集計、そして調査結果の機関紙「よこはま演劇」への発表と、大変なエネルギーを必要とする作業です。研究所員は小劇場の芝居創りとともにこの作業にも関わっています。調査から得られたデータは、横浜の文化状況を記録して未来へ役立たせる貴重な意義をもつものだと考えます。累積した調査原票や集計原票などの資料は膨大な量に上り、資料室はパンク。やむを得ず栃木県上三川町在住の所員(OB)にお願いして倉庫に保管してもらっています。その資料はかけがえのないものです。できることなら公的な演劇センターの資料室に、安住の地を見つけれないものかと思っています。



前略、スモモ様

劇団麦の会

岡本みゆき

川崎演劇まつり「モモ」の稽古を見学に行った。見ているうちに何やら懐かしい気持ちが湧いてきた。「十一人の少年」を思い出したのだ。知る人ぞ知る「10+5」という劇団をつくり、「モモ」を下敷きにした北村想のこの作品で、私はスモモ役をやったのだ。当時とても盛り上がり、"10年後に同じメンバーでまたやりたいね"などと言っていたが、メンバーの何人かは私にとって行方不明になってしまった。

あれからいろんなことがあったが、今はこうして麦で芝居を続けている。途中で芝居を投げなかった自分は偉いと思うが、果たしてあの頃の芝居に対するドキドキワクワクした気持ちは今でもあるのか、疑問だ。公演が終わるとすぐ台詞を忘れる私が、珍しく思い出した『あ、星だ。小せえ星が出たぞ。』というスモモの台詞。私の小せえ星は、私にちゃんと見えているのだろうか。私は、スモモをまだ演れるのだろうか。

県演連のコーナー

リポート
劇団かに座

田辺晴通

■ 理事会の報告

当県演連の活性化に伴い、各団体の理事が定期的に会合を持ち、私どもが「これから為すべきこと」を協議していることはあまり知られていないようです。各団体の稽古日等のことから全員出席は難しいところですが、その内容はみんなが知っておいて頂きたいことばかりですのでその概要を報告します。

1) 県立青少年会館の廃止、公共ホールの自主事業の増加・市行事優先等のことで、年々上演場所の確保が難しくなってきたことへの対応策(アマチュア演劇等の為にという建設当初の目的がどこかにフットンデンまったホールもある)。
2) 県我々への予算が毎年削減(県芸術財団へは「億」の金が交付されているのに)されている現状のなかで、演劇フェスティバルをどのようにしていくべきか《理事会では期間を定めたなかの公演は総てフェスティバル参加にしようとしている》
3) 予算削減の防止には繰り返しの増額陳情の提出が重要であり、これの文面の検討と陳情(県文化室で言う合同公演にはどの位の費用が必要かの予算書も提出する)。

4) 県演連の体質強化を図るための、未加入団体(継続的に活動している団体)への加入呼びかけをどのようにしてゆくか。

このほか、青少年センター等紅ヶ丘文

化ゾーンの新構想が発表されていることについての県演連としての行動、フォーラム、相互観劇などの連帯意識化について協議している。

■ 交流会の報告

田辺「飯田さん、交流会の締切り今日だけ何枚来てます」飯田「まだ〇枚だけ、明日一日待って連絡してみるよ」～数日後～飯田・田辺「まだ〇団体④だけど、この人数は集まるんじゃないかな、ヨシそれで申し込もう」と、人数が毎回不確定でハラハラしています。当日のプラスは大歓迎ですが、もし申し込み人数分の会費が集まらなかったときは誰かが負担しなければならぬからで、劇団側の事情もあると思いますが事務局の立場に立って御協力をお願いします。

サテ交流会、大いに飲む人語る人、どんどんお銚子運ぶ人、も含めて新年交流会は大いに盛りあがったと思っています。今回は特に劇団同士の隣り合わせを禁止?したので、最初は少々固くなった人もいたようですが立場立場で話しがはずんだようでした。

この交流会がほんとうの交流の場となるのはまだ先のことはと思いますが、芝居の客席などで顔が合ったとき、例えひと言でも話しができるのもこの場があったなればこそと思いますので、一人ポツーンとした人(或いはヒト休み)も積極的に話しの輪に入り、未参加の人もどんどん参加して頂き肌で感じて頂きたいと思っています。

ただ現在の会場は海鮮料理の店なので、サシミなどナマモノのダメな人はお酒の量でカンベンして下さい。

最後に、この交流会が早く川崎・横須賀などでもできるようになればと——。(小田原で一泊素敵じゃないですか。

編集後記

「神奈川県演劇連盟」と書くと、何かとてもグレードのある組織のように思えます。加盟劇団数14というのは多いのか少ないのか!?——ともあれ、これからの活動が〈名と実〉を作っていくのだと思います。〈祭〉

日々の疲れの渦の中に、コーヒー1杯分の優しさをそそぎこんでくれる芝居よりも、したたかなウソの世界を誠実に表現する空間を好む私は、まるで、失恋時に中島みゆきを聴きあさるOLみたいです。なに言ってるかわかんねえーよ。はい。

〈泉〉

次号は、新しい編集スタッフと共同で作ります。どんな方がやって下さるのか、とても楽しみです。「ドラマ神奈川」、評判も上々のようですので、自信を持って取り組んで下さい。

交替される編集スタッフの方ご苦労さまでした。

投稿大歓迎!

